

長崎の鐘はほほえむ

残された兄妹の記録

永井 誠一 ・ 永井 茅乃



永井誠一・茅乃

(ながいまこと・かやの)

誠一君は、いま時事通信社編集部でせっせと教育版の原稿に朱筆を入れていきます。おとうさんのあとをついで、一度は医者になろうとした誠一君でしたが、ジャーナリストになったわけです。東京都練馬区田柄町二ノ六四〇一番地の小寺さんの家に下宿して元気で通勤しています。

茅乃さんは純心女子学園の三年生、絵が好きで、卒業したらお兄さんのそばから上級学校へ通学したいというのが希望です。長崎市上野町三七三の叔父さんの家にいます。

長崎の鐘はほほえむ

●1959

昭和34年8月9日 第一刷発行
昭和34年8月20日 第二刷発行

著 者 永 井 誠 一
永 井 茅 乃

発 行 者 小 石 原 昭

印 刷 者 浅 野 剛

発 行 所 株式 知 性 社
会社

東京都千代田区神田美土代町26

振替口座東京93086

電話丸の内(23)4772・5346

定価280円

印刷・金羊社 口絵印刷・栗田印刷 製本・中央精版印刷
万一審丁、乱丁がございましたら、お買求めの書店か本社でお取替えいたします。

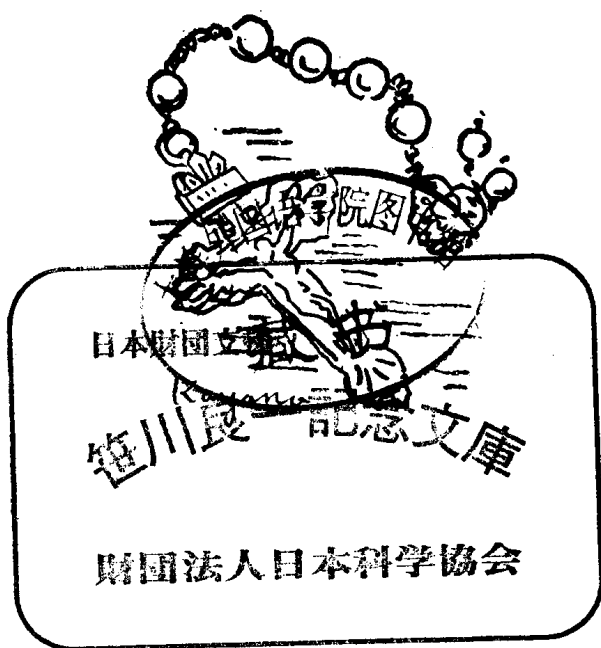


日文701443203

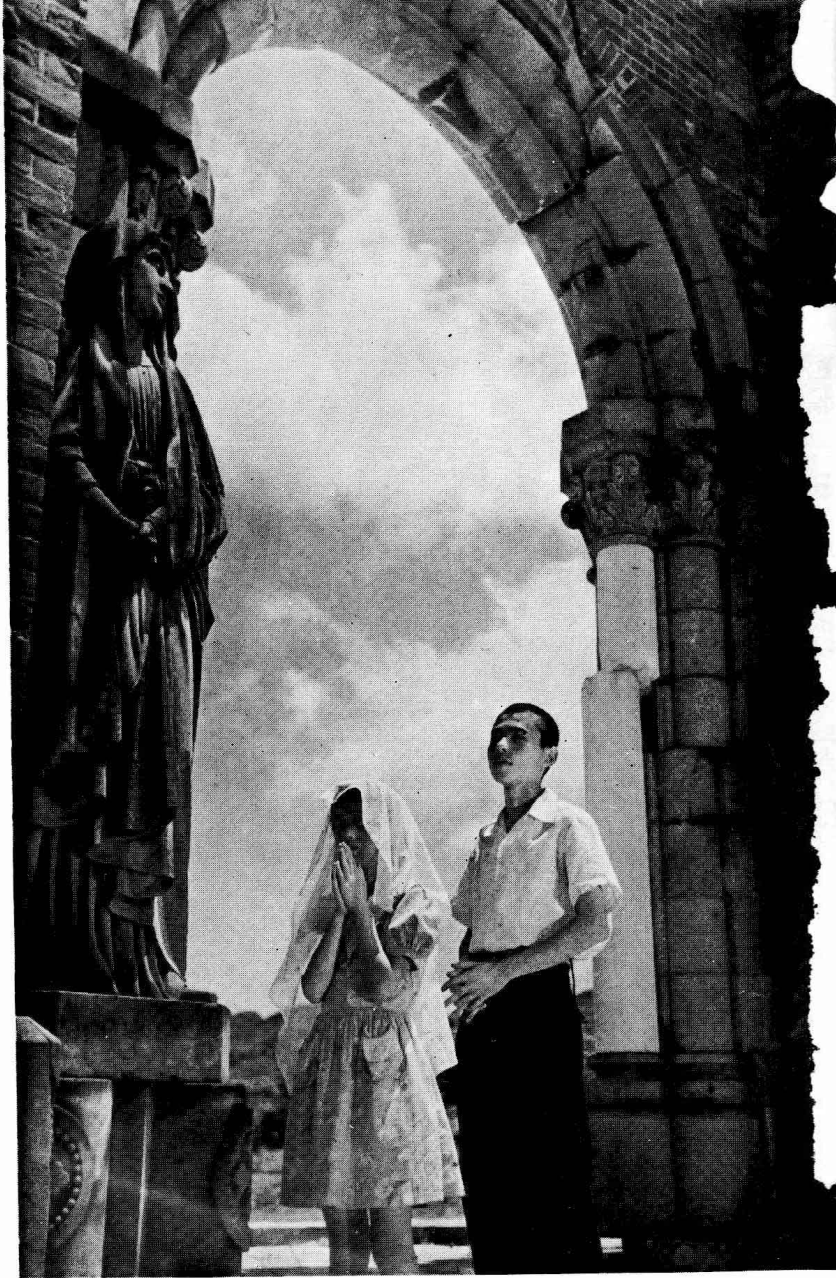
長崎の鐘はほほえむ

残された兄妹の記録

永井 誠一・永井 茅乃



知 性 社



“悲しみのマリアの像”に祈る誠一君と茅乃さん



病床の父と楽しく話しかうひととき

兄妹は一日でも永くこういう日がつづくことを祈ったが……



母の緑さん

やさしかった母の墓にもうでて

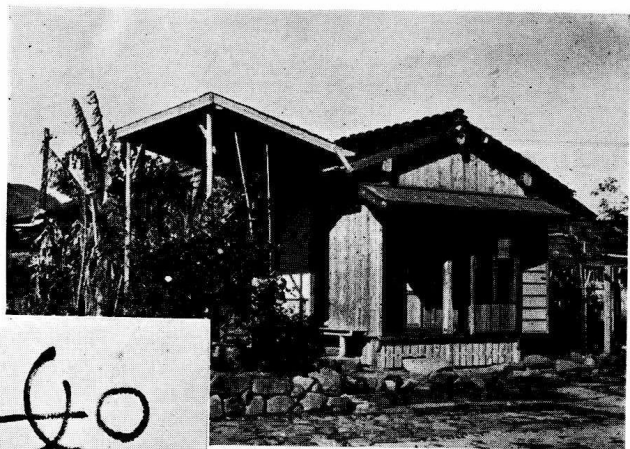




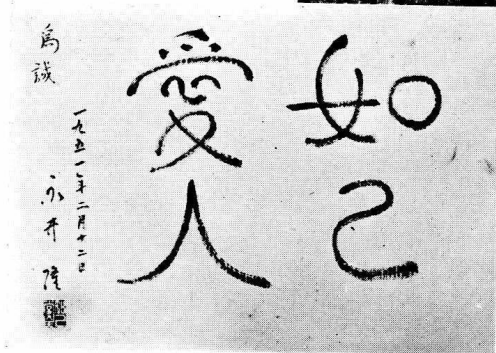
聖フランシスコザビエル四〇〇年祭の日
その遺腕に礼拝する父隆博士



孤児になった兄妹は明
るい叔父さんの家庭へ



思い出の如己堂



最近の兄妹（左端は友人中村武文君）



はじめに

長崎の町をつつむ七つの丘から、平和な美しいアンゼラスの鐘が今日も鳴りひびいていることでしょう。長崎は平和な町にかえりました。

一四年前の八月九日——この長崎の町から美しい鐘の音をうばったもの。鐘の音だけではありません。なによりも尊い数多くの人の生命を。そして家を、花を、草を。

ぼくたちのおかあさんもこの日に原子雲といっしょに昇天しました。

たった一発の原子爆弾。これがすべての人から幸福をうばってしまったのです。

ぼくたちのおとうさんもこの日を境にして原子病で倒れ、遂に六年間の苦しい闘病生活の後おかあさんのあとを追いました。

おとうさんはこの六年間に、平和への願いをこめて原子爆弾の惨酷さと原子病の恐怖を『長崎

の鐘』『この子を残して』等の著書に書きつづけました。幸いに数多くの方々に愛読していただき、ぼくたち兄妹はいつのまにか『長崎の鐘』の誠一君、『この子を残して』の茅乃ちゃんと呼ばれるようになりました。そして、おとうさんとぼくたちとの苦しい闘病生活のころから今日まで、たくさんの方々からよせられたまごころあふれる励ましと温い愛情の手。この尊い隣人愛をこころの支えとして、母をうばわれ、父をうしないはしたもの、ぼくは社会人に茅乃は高校三年に成長しました。

明るく元気に、うれしいことばと嬉しいと感じ、かなしいことばと感じる素直なこころの人間に成長することができたのです。

知性社の宮野さんから

「もう、おかあさまがなくなられてから一五年目。おとうさまがなくなれてから九年目になるわけですね。それに社会人としてスタートされた年ですね。おとうさまおかあさまとの親子の愛情、ご兄妹の愛情、社会の方々からよせられた愛情をめぐって、いろいろな思い出があらうでしょう。そういったものをまとめてみられるお気持はありませんか」

という熱心なおすめがあったときも、ぼくたちの生活の記録をまとめて出版するというような大それたことは、ほんとうに考えてもみませんでした。ぼくにとっては大仕事であり、また記録として末長く残ることなどを考えると、ぼくにはとうていできることではないし、それに、社会人としてスタートしてまだ日も浅いの、与えられた仕事に支障をきたしてはいけなないと考え、いったんはおことわりしました。しかし宮野さんは「もう一度考えてみて下さい。二日ばかりお待ちします。二日後にまたご返事をうかがいます」と、その日は帰られました。

その晩、下宿の四帖半で、いろいろと考えてみました。しかし、どう考えてもぼくにとっては自信がなく、ころろを決めかねていました。

そんなときに、ぼくはふとうさんが書き残していった歌を思い出したのです。

新しき平和の御代の防人は

裂かれし町ゆ群り出でず

そうだ。幼い日から住みなれた故郷の長崎。平和は長崎からを合言葉に、あれから一四年、いまもお叫びつづけている町長崎をあとにして、ぼくは社会へ出たのだ。しかも、ぼくだって茅乃だって平和を願う若い世代ではないか。思い出を書くことは、ぼくの願いとおとうさんのこの歌を生かすことではないだろうかと思つたのです。それに新しい人生のスタートをきつた今、美しい手をぼくたちにさしのべてくださった方々にお礼を申し上げ、これからも兄妹なかよく、明るく助けあつて生きてゆくことをお約束し、ぼくたちの幼いころの思い出、おとうさんやおかあさんの思い出をまとめて、ぼくたちの人生前半の思い出の記録として残すとともに、ふたたび原子爆弾の悲劇をくりかさないようにとの熱い願いをこめて、この本をまとめてみるという気持ちになりました。

筆はぼくがとることになりました。いざ書きだしてみると、つい二、三日前のように思われた過ぎさつた生活のなかには、容易によみがえつてこないもの、うすれてはつきりしないものがたくさんあり、困りました。別に日記をつけていたわけではなかったのですが、うかんでくることをつぎつぎに、幼稚なことばでしか表現できませんでした。ぼくたちは不幸だったかも知れません。原子野での原子病に倒れたおとうさんの生活、それはたしかにみじめな生活でした。でも、ぼ

くたち親子は、これが天地万物の創造主なる天主のみ旨であると信じ、なぐさめ、励まし合つて生活しました。おとうさんの闘病生活中に示した平和への努力は、ぼくたちに一生忘れることのできない教訓として残り、ぼくたち兄妹にしめた尊い愛情のかずかずは、今もおぼくたち兄妹の胸に美しい思い出として残っています。おとうさんの愛した白百合の花のように清らかな思い出として。

このおとうさんの闘病生活中のこころの支えとなつたものは、信仰であり、ぼくたちへの愛情であり、美しい隣人愛でした。

ぼくはこの貧しい記録を通して、ぼくたちによせられた数限りないご好意に対して心からお礼を申し上げます。

昭和三四年七月二五日

永井

誠一
茅乃

目次

序章	はじめに……………	7
第一章	やさしきみ母よ……………	17
第二章	父母と子と運命と……………	23
第二章	原子野の鐘……………	61
第三章	ほろびぬものを……………	93
第四章	白ばらの花より香り立つごとく……………	117
第五章	風浪に流されず……………	143
終章	新しき門出の前に……………	163

長崎の鐘はほほえむ

— 残された兄妹の記録 —